発表題目：歩くことと戦争の記憶の継承

所属：　日本学術振興会特別研究員 PD（広島大学）
氏名：　愛葉　由依

1200 字程度で発表内容を記載してください。

戦争体験者なき時代を迎えつつあるいま、私たちは、いかにして自らが体験していない戦争の記憶を身をもって知り、戦争体験者と思いを分かち合うことができるのだろうか。戦争体験やその記憶の継承、とりわけ原爆体験やその記憶の継承をめぐっては、これまでにもさまざまな取り組みがなされてきている。代表的なのは、原爆被爆者が語る原爆体験やその記憶を私たちが聞く、原爆被爆者が書いた原爆体験やその記憶を私たちが読む、原爆被爆者が描いた原爆体験やその記憶を私たちが見るといったものである。これらの取り組みの多くは、原爆体験やその記憶をモノとして取り出し、原爆被爆者から次世代を担う私たちへと正確に受け渡すことが継承の大きな枠組みとなっている。しかし、単に原爆体験やその記憶を原爆被爆者から切り離し、固定した状態で次世代を担う私たちへと受け渡すことによっては、私たちが自らの体験していない戦争の記憶を身をもって知り、原爆被爆者と思いを分かち合うことができるようになるとは言い難いのではないだろうか。いま、私たちは、これまで行なわれてきた継承の枠組みそのものを問い直す必要があるのではないだろうか。

そうしたなかで私は、2015 年から 2019 年にかけて、私の祖父とともに何度も広島へ赴き、祖父が配属されていた海兵団の跡地、新兵教育を受けていたところ、救護活動・遺体処理活動を行なったと思われるところなどを巡り歩きながら、祖父の戦時中の記憶を紡ぎ、それらをめぐって対話を重ね、文章にも編んできた。祖父もまた広島を訪れる度に、自らの足でそれらの地を巡り歩くことやそれを通して戦時中の記憶を想起することを重視するようになっていった。そして祖父は孫とともにその一連のプロセスに身を投じ、自らの記憶を紡ぐとともに、自らの思いを孫と分かち合えたことに満足感を示すようになっていった。孫の私もそうした祖父のプロセスをともにし、さらに祖父なきあともひとりでそのプロセスを歩いてたどり直すことで、自らが体験していない戦争の記憶を身をもって知ることができるようになっていった。

本発表では、従来の継承の枠組みを問い直すところから始め、私自身が研究者である以前にひとりの人間として、ひとりの孫として祖父とともに行なってきた 2015 年から 2019 年にかけての実践のプロセスと、祖父なきあとひとりで行なった実践のプロセスをたどる。そのうえで、祖父が自らの足で広島を巡り歩いたこと、また祖父が孫の私とともに広島を巡り歩きながら自らの記憶を想起し対話を重ねたこと、そして孫の私がそのプロセスをともにしたこと、祖父なきあともそのプロセスをひとりで歩いてたどり直したことは、双方にとってどのような営みだったのかを考察する。以上を通して、私たちが戦争体験者とともにその体験と関連するところを巡り歩きながら戦争の記憶を紡いでいくことや、体験者なきあとも私たちがそうしたプロセスを歩いてたどり直していくことに、自らが体験していない戦争の記憶を身をもって知り、戦争体験者と思いを分かち合う可能性があることを示したい。